Ⅱ-2-4

韓国明太漁業始末

釜慶大学（韓国・機構学術交流協定締結機関）
李　根雨

明太は長い間、朝鮮半島の住民に愛され、親しまれてきた魚である。それの何よりの証拠が明太のことを歌った「明太」という歌曲である。まずはその歌の内容を読みながら、明太という魚の実態を調べることにしたい。

1　歌曲「明太」

明太という曲は1951年に作られた。作曲者の辺焄は朝鮮戦争に参加し、作詞者の楊明文も従軍記者であった。その当時としては、あまりにも革新的であって、1952年の初演では酷評された。しかし、今は多くの人から愛されている韓国歌曲を代表する曲の一つとして歌われている。朝鮮戦争の真っ最中、それに厳しい避難生活におおわれながら、作詞者の楊明文はなぜ明太のことを歌おうと思いついたのか。

彼は戦争中、南の方に避難して大邱という町で苦しい生活を送っていた。歌の後半で出てくるように、彼は乾ききった明太をつまみとしながら焼酎を飲んでいた。乾明太は焼酎には向かないが、貧乏な生活のなかでものを選ぶ余裕もなかったので、手ごろの明太しか食べられなかったのだろう。それで作詞者は明太のことで思いをめぐらせ、一つの歌に仕上げたに違いない。歌の内容はどうであろうか。はたして、明太の実態をそのまま反映しているのだろうか。歌曲の内容はつぎのようである。

「青黒い海、海の中を群れをなし、冷たい水を呼吸して、体や頭が余るほど大きくなってから、愛する伴侶とともに、限りなく泳ぎ、踊り、また波になびかれ、ある優しい漁師の網に引っ掛かれ、住みやすい元山港の見物をしてから、エジプトのミイラになった時、心細く貧しいある詩人が夜遅く詩を書きながら、焼酎を飲む際に、彼のつまみになってもいい、彼の詩になってもいい、びりびりと引き裂かれ、この身がなくなっても、名前だけは残るだろう、明太、明太と残るべきだろう、明太、明太と残るべきだろう」

1）青黒い海、海の中を群れをなし、冷たい水を呼吸して

明太は主に北太平洋の大陸斜面で棲息する。韓国の周辺では、東の海で回遊また産卵する(90～200m)。10℃以下の低温水層で活動する寒帯性漁族で、適温は２～４℃といわれている。

明太の漁期が真冬であることも、明太のこのような習性と関係する。稚魚はもっと低い水温を好み、１～６℃のところの深い海で生活する。また、大きな群れをなして移動し、また集団で産卵する。産卵期の水温はだいたい４℃であるという。まさに冷たい水を呼吸する魚である。

２）体や頭が余るほど大きくなってから

明太は３～４年で成魚となるが、体長30～80cm、体重600～800gまで成長する。体長が30cmほどになるとすでに産卵をすることができる。小さい甲殻類やいわしなどの魚、いか類を食べながら成長する。下の顎が上の顎より長く、口は大きい。鱈科に属する所以でもあろう。目は頭の中央より上にあり、また大きい。このような特徴のため、明太は魔除けなどにつかわれるようになる。

３）愛する伴侶とともに、限りなく泳ぎ、踊り、また波になびかれ

３～４年で成魚なると群れを作り産卵に向かう。メスは約10～100万個の卵を産み、９～28日がたつと孵化する。メスが産卵するとオスは精子をまき体外受精をする。その時、オスはさかさまに泳ぎながら、射精するという。オスは種の繁殖のため、本能に従いながら、メスの卵子放出を追いかけるのである。すると、とても踊るとは言えない。

４）ある優しい漁師

当時の漁師は零下20℃まで下がるきびしい条件で、明太操業するため、犬の皮で作った腕まきや膝宛、靴をはいた姿だった。それに、手には十手のような長い鈎をもっていた。そのすがたを見て、やさしいという言葉は口にできないだろう。これは、詩人のやさしい心からこぼれた表現であり、現実とはいえない。

５）網に引っ掛かり

普段は刺網を使った。網目の大きさは明太の頭部が挟まるように調整される。網目に魚の頭部が挟まると、その網目から逃れ出ようとしても、鰓蓋や背びれが網に引っかかって逃げられなくなる。他の漁網が、かぶせ捕る、すくい捕ることによって、水域の魚群の種類に関係なく一網打尽にしてしまうのとは対照的に、刺し網は、比較的狙った魚種のみを捕獲することができるため、効率の良い漁具といえる。とくに、朝鮮沿岸に回遊する明太は、産卵を目的とするので、ほぼ同じ大きさであって、刺網がもっとも向いていた。このように沿岸で網でとれた明太を網太と呼び、釣であ

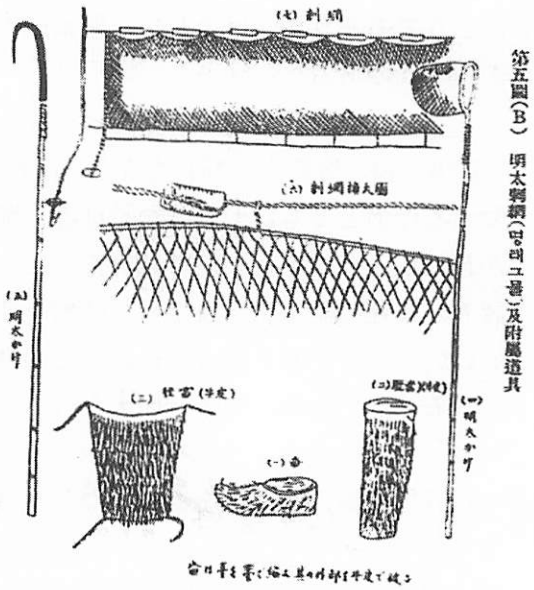

図１　明太漁具と漁師の服装

げたものは釣太、旧暦11月にとれるのはウンオバジ（鮎おい明太）、ドンジバジ（冬至明太）、マクムル太（おわりころの明太）、江原道でとれたものを江太、杆城でとれたものを杆太、春にとれたものを春太など、取り方、時期、場所、大きさによって様々な名称でよばれた。

6）住みやすい元山港の見物をしてから

元山は木浦と馬山と並んで、もっとも風光明媚なところとして知られている。また釜山と仁川とともに開港場としても有名であった。1924年ごろの調査によると、人口は2万8千人であり、その中、朝鮮人が2万人、日本人が7千5百人にのぼったことがわかる。朝鮮の東沿岸でもっとも賑やかな町であり、1914年には京元鉄道が開通され、また1920年は咸鏡線も開通した。元山は自然的な地勢が漁業に適しており、また漁獲量も豊富であって、まことに住みやすいところといえる。

図2　植民地時代の元山の町風景

7）エジプトのミイラになった時

海でとれた明太の内蔵を取り出してから乾燥させる方法はミイラに似ている。しかし、三寒四温という特徴的な朝鮮の気候が大きく役にたつ。三日は凍った状態になり、四日はゆっくりととけていく。それを繰り返す間に、肉はぼろぼろに柔らかくなる。それで、きみを帯びたものを黄太とよぶ。ただ乾燥させると、肉質が固くなり、また色も黒くなってしまい、黒太と呼ばれる品質の悪いものになる。朝鮮の明太需要に注目して、早くから日本の漁民は日本でとれた明太を輸出しようという動きがあったが、望ましい結果にはならなかった。酷寒の北海道で乾燥させた明太は固くて朝鮮人の嗜好をみたせなかった。それを朝鮮では北太と呼んだ。また、生のものを生太、半乾きのものをコダリ、凍結されたものを凍太と呼ぶ。

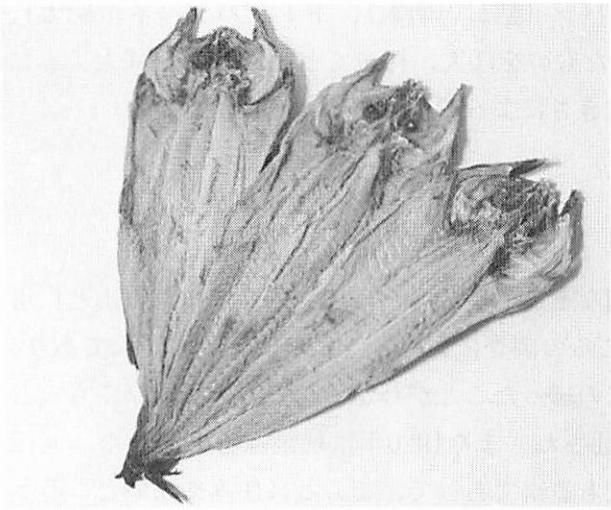

図３　黄太

８）心細く貧しいある詩人が焼酎を飲む際に、彼のつまみになってもいい

明太は詩人一人が食べたものではない。1932年には11万トンがとられ、当時朝鮮人口２千万が１人当たり12匹ずつ食べたことになる。日常的な食生活を始めとし、祭膳、厄払い行事、薬用にまで広く使われた。食べ物としても、あつもの（生太と凍太の区別あり）、焼き物、鍋料理、蒸し、煮つけ、臓詰め、魚煎、たたきと多様な方法で調理される。それに、内蔵などを使って明太子のほかにも、はらわた塩辛、えら塩辛などをつくる。

９）名前だけは残るだろう、明太　明太と残るべきだろう

まず、明太子に見られるように、日本では明太という言葉だけではなく、唐辛子を使う明太子（韓国では明卵という）の製法まで受け入れている。中国でも明太はほとんど取れなかったので、明太魚という朝鮮の言葉をそのままつかったらしい。ロシアでもＭＩＨＴａЙ（みんたい）という。もちろん、沿海州地域の住民がこの魚に注目して、ＭＩＨＴａЙと呼んで、それが朝鮮の方に伝われた可能性は否定できない。しかし、沿海州で多く消費された痕跡はなく、また太というのは、朝鮮東沿岸の魚類の語尾としてよくつかわれていたので、現在としては朝鮮に起源を持つ言葉と見ておきたい。すると、詩人が歌ったように、明太という言葉は東北アジアを中心に残っている。

このようにみると、歌曲明太は、明太の実態に迫る歌であり、また朝鮮の人々が愛した明太への讃歌であるといえる。

２　明太の出現と消滅

それでは、明太という魚はいつから朝鮮の沿岸でとれ始め、その言葉はいつから使い始めたのだろうか。明太はあまりにも深く朝鮮文化と関わっているので、ずっと朝鮮海岸で取れ続けた魚

と思いがちであるが、そうではないらしい。

1）明太という言葉の初見

その言葉の初見は案外新しく、朝鮮の『承政院日記』孝宗3年（1652）9月10日条ではじめて見える。江原道の進上品の中に鱈卵のかわりに明太卵がはいっていたことが問題になっている。

「司饔院官員、以都提調意啓曰、江原道各殿進上中、鰱魚卵醢、代以大口卵醢、膳狀中書塡、而以明太卵來納、事極可駭、故陪持人推問、則封進官原州牧使牒報入納文狀內、監司出巡後、本營膳狀及所封各官輸送狀俱以大口卵醢、書塡、而各其所封官、一齊皆以明太卵持納封進云、事甚慢忽、令本道査覈、從重推考、以杜日後之弊、何如？ 傳曰、允。」

ただ、それより120年まえに成立した『新増東国輿地勝覧』（1530）には咸鏡道明川の物産条に無泰魚がみえる。明川はほかでもなく最初に明太が取れた場所として伝われているところである。また、黄道淵の『方薬合編』（1884）では、「明太は明川からとれる魚であり、無泰魚ともいう」と記録している。しかし、『輿地図書』（1765）では、明川の無泰魚と吉州の明太魚を併記しており、無泰魚が明太と同じ魚であるか確かではない。

可能性としては、すでに16世紀の始めごろからは、朝鮮の東沿岸に出現して、最初は名前のない魚、すなわち無泰魚と呼ばれたが、明川から多くとれるので、明太（明泰）とも呼ばれるようになったとも考えられる。ある時期には、二つの呼称が併用されたが、徐々に明太に帰着したのかもしれない。17世紀に入っては、朝廷の記録にも名が見えるほど、かなり消費されるようになったと思われる。

2）朝鮮の気候環境

早くから、西洋史では17世紀危機論というものが台頭して、1970年代からは、異常気候という環境変化に見舞われている。最近、韓国でも朝鮮王朝実録の記事を利用して、17世紀を中心とした気候変化を追求する動きがみられるようになった。その一つの成果として、李泰鎮の「小氷期天変地異研究と朝鮮王朝実録」（『歴史学研究』149、1996）があげられる。彼は、1500年から1750年の間を寒冷化が強まった時期と判断している。その原因については、今も議論がおさまっていないが、寒冷化を伴う異常気候は確認できる。明川の無泰魚を最初に記録されたのが1530年であり、明太卵が進上されたのが1652年であるので、まさに寒冷化の時期にあたる。すると、明太は朝鮮の寒冷化と相まって出現した可能性が高い。

17世紀という時期は、東アジアでも動乱の時期ともいえる。中国では、女真族が南下して後金を建国し、ついには明を滅ぼした。いわゆる明清交替期である。朝鮮でも1520年代から急激に寒冷化の徴候が現れ始めて、また日本と清の侵入をうけ、社会全般が様々な変化に直面する。租税制度から家族の運営原理まで変わっていく時代である。その主な原因は農業の不作である。1670年と1671年の大饑饉で百万の人々が死亡したが、それは冷害による不作の結果であった。

農業の疲弊するなか、食べ物に苦しんでいた人々を救ったのは、東沿岸から豊富に取れるよう

になった明太であったのではないか。短い間に明太が朝鮮社会に浸透したことからも推測できる。海水温度の変化で農業の方は不作が続く中、あたらしい蛋白質源として明太は脚光を浴びたのだろう。漁獲量が多いだけではなく、保管と輸送も容易だったので、たちまち庶民が日常的に食用することになった。また気候の変化とともなって、これまで進上品として珍重された鱈の漁獲量は減少すると、明太がそのかわりとなる。

表1　朝鮮王朝にみる雹などの頻度. 李泰鎮、「小氷期天変地異研究と朝鮮王朝実録」(1996) による

年代	雹	霜	非時降雪	合計
1392-1450	156	62	41	259
1451-1500	52	10	22	84
1501-1550	552	138	22	712
1551-1600	246	268	43	557
1601-1650	247	87	49	383
1651-1700	295	123	119	537
1701-1750	202	73	65	340
1751-1800	79	7	8	94
1801-1863	26	1	1	28

3）明太から北魚へ

朝鮮では名のない魚はたべなかったし、魚と呼ばない魚は祭需品として使わない。すなわち、明太という名をもつ魚は祭床にあげられなかった。それで北魚という名ももつことになったと思われる。北魚という呼称は、18世紀の始めごろ（英祖）から承政院日記にみえる。無泰魚の初見からは二百年、明太の初見からは百年が経っている。北魚という新しい名をもつようになった明太は、祭膳の一翼を担うようになる。

石首魚という名をもっているキグチ（ゾギ)、ホタルイカ（コルツギ）やヤリイカ（ハンチ）とそれほど変わらないイカ（烏賊魚）とタコ（文魚）も魚とよばれるので祭床にあげられることと同じ道を明太はたどることになる。

4）明太の消滅

明太は1910年から1932年まで、年間平均5万トン程度が漁獲され、朝鮮総漁獲量の10%以上の比重を占めた。明川などの明太産地には、丸太のように明太が野放しされていて、犬がそれを口にくわえて歩き回るほどであったという。食べ物としてだけではなく、明太はいろいろな目的につかわれた。薬用としては、下痢には明太のあたまを乾燥させて粉にしたものを飲むとか、一酸化炭素中毒や蛇毒には黄太を煮込んでその汁を飲むとか多様な民間療法がつたわれる。さらには、その皮を粉にして酢とまぜると水虫の薬になるという。肝油は点灯用あるいは解毒剤として使われる。

ほかにも、大きい目や口は魔物を追い払う力をもっていると考えられたので、厄払いや魔除けに使われる。いまもたびたび新車の下部に明太を縛り付けているのを目にする。厄払いをする巫女の手にも、花婿をかこんで彼のあしのうらをたたく村の若者の手にも、おかずを作る母の手に

も、明太を見ることもできる。

しかし、現在は韓国の沿岸で、明太はほとんどとれなくなった。ロシアから輸入したり、ロシアから明太の漁獲クオータを買い取って漁業を営むことになった。遠洋漁業が発達してなかったら、明太はことばの通り、幻の魚になったにちがいない。

表2　明太の漁獲量

年度	総漁獲量(T)	明太漁獲量	明太比(%)
1911年	66,356	11,587	17.5
1912年	92,216	12,086	13.1
1913年	168,331	11,663	6.9
1914年	218,250	30,646	14.1
1915年	328,598	19,467	5.9
1916年	349,076	59,353	17.0
1917年	322,018	90,163	28.8
1918年	357,154	45,588	12.8
1919年	407,355	77,530	19.0
1920年	379,526	68,635	18.1
1921年	442,234	71,613	16.2
1922年	490,369	58,531	11.9
1923年	551,985	65,353	11.9
1924年	538,910	55,269	10.3
1925年	537,383	51,721	9.6
1926年	586,594	53,519	9.1
1927年	830,514	40,298	4.9
1928年	848,486	46,888	4.5
1929年	904,834	22,116	2.5
1930年	866,644	21,107	2.4
1931年	1,039,470	43,588	4.2
1932年	1,168,178	111,471	9.6
合計	11,494,481	1,068,192	11.38

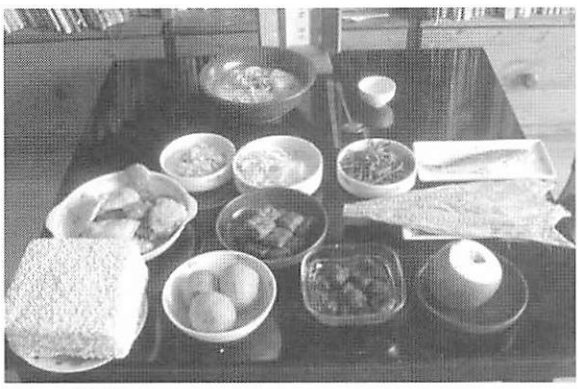

図4　祭膳の北魚

韓国の明太漁業の起源は不明確なところが多い。おそらく、全世界的に寒冷な気候の襲った17世紀ごろ、以前はより北の海を回遊した明太が冷たくなった海水に乗ってはじめて朝鮮の海岸 に姿を現した。新しく取り始めたこの魚は、取れた地名（明川）に東海岸で魚名の語尾としてよくつかわれた太という字をつけて明太と呼んだらしい。

明太漁業は真冬の強い風のなかで行われる。海上の気温は零下20度までさがるという。それ

に刺網という単純でありながら経験を必要とする網を使う。それで李朝の末期から朝鮮海に出漁した日本漁民も発動船を導入するまではうまく明太をとることはできなかった。1932年には11万トンも取れた明太は、いまは海水温の上昇にともなう回遊経路の変化などで全く取れなくなった。しかし、ある詩人の予言の通り、明太という名だけは、ロシアや中国にも伝われ、日本でも明太子にのこっている。